

第9回 床几山の水道施設と外灯

旧松江市内は良質の飲料水に恵まれず、多年水飢饉や伝染病等に市民生活は脅かされてきました。近隣から水売りが来るものの、それを買って飲む習慣があるのは生活にゆとりのある者だけで、松江市民にとって良質の水の安定供給は多年の夢でした。市民の飲み水はそれまで井戸、湖水、濠川の水を使用してきましたが、それらの大半は飲料用としては不衛生なものであり、各種の伝染病に悩まされてきました。



W. K. Burton.

明治になり、松江市や島根県も上水道敷設に動き出すのですが、経済的事情、数回にわたる戦争などによって延びに延びてやっと大正8年3月、市民への供給体制が整います。それまでの経緯をたどると、明治26年4月、市長に対し、水道敷設に関する建議書が提出されたものの、費用が多額に上りすぎるため一度は見送られます。しかし、明治28年になって新たに水源調査が始まり、松江市は内務省に対し専門技術者の派遣を要請し、W・K・バルトン(*1)と同省土木監督署技師高橋辰次郎が派遣されてきました。

調査は明治31年4月に終了し、各候補地の中から西忌部の清水(サミズ)を最も適当としました。サミズは水質が良く、噴泉の地位が高く、水量も1日あたり12万立米と豊富なことから選ばれました。同時に報告書では市内の配水池として、松江城のある城山も候補に上げられていました。しかし、工事費の試算と用地取得費は莫大になり、加えて27年の日清戦争、37年の日露戦争により財政は逼迫し、水道敷設計画は頓挫します。



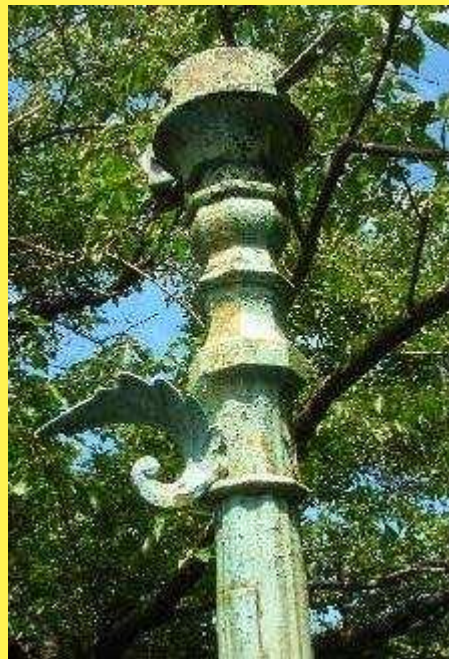
中島銳治

明治41年に陸軍歩兵第63連隊が配置され、同年の山陰鉄道の松江駅開業もあって、上水道敷設は急務と考えられ、松江市長は東京大学の中島鋭治に水源の再調査を委嘱しました。中島はバルトンの教え子でもあり、結果としてバルトンの主張通り忌部を水源とすることが最適という結果を得、それを受けて明治45年2月、敷設計画が開始されました。大正3年11月、工事全体の起工式が行われましたが、用地買収の遅れ、その後の戦争、そして大正5年冬の大雪などにより、数度の工事延期を余儀なくされ、やっと大正7年1月に主要部分の工事を完了し、大正7年6月正式に給水が開始されました。



松江紅水浄水池

さて、今回紹介するのはその島根県で初めての水道施設のうちの、床几山に置かれた配水池です。もちろん堀尾親子がここから松江を眺め、亀田山を最終的に松江城の築城地として選定した場所であることは松江市民ならだれでも知っていることです。サミズから引いた水を忌部の浄水場で濾過し、それをポンプで床几山の上まで送り、そこから松江市内に配水する仕組みです。大正3年から工事にかかり大正6年(1917)に完了しています。現在この施設は水道施設として使われなくなっていますが、床几山配水池公園として市民に開放されています。一部を除き、かなり建設当初の姿が残されています。配水池そのものもほぼ当時のままですし、計量器室や入り口の門などもそうです。ポンプ室や吏員宿舎は昭和の早い時期に建て替えられたものが今は存在していますが、その入口に今も立っている2本の外灯は、当時のものそのままではないかと思われていました。



今回の調査でその外灯に思いがけないものが見つかりました。写真を見てください。上の方に木の葉を模したようなレリーフが二つ付いています。あることがきっかけでその外灯を詳細に調査してみると、なんとそのレリーフの上側に文字が見えます。下から見上げるばかりでしたので上に文字が書いてあるなど思いもよらないことでし

た。その文字は浮彫のように膨れています。そしてそこに書いてあるものは全く想像もしなかったことでした。すべてが解明できたわけではありませんが、その中の一つにはっきりと明治 24 年 3 月と、原、正、という文字が読めます。残っている 3 枚のレリーフにはすべて異なった文言が書いてありました。明治 24 年、なんということでしょう。その時期にこの床几山配水池があったはずがありません。それどころか、松江に最初は電気が引かれたのは明治 28 年です。ちなみに城山、椿谷公園の一角に石炭火力発電所が建設されたのが始めです。さてどう考えたらいいのでしょうか。



電気がある前にあった外灯。ひょっとしてガス燈だったのか(日本最初の西洋式ガス灯は明治 4 年、大阪)。松江初のガス灯も明治 7 年 3 月点火とあります(1941 年の松江市史より)。もう一つ明治 24 年 3 月というのは、奇しくも第 15 代松江大橋の開通した時。15 代大橋は、現在の橋の二つ前の橋で、評判の悪かった鉄骨のワーレントラス橋。ひょっとしてそこに使われていたのかもと思い、古写真を眺めまわしてもそんな形の外灯は見えない。とするともう一つ考えられるのは、どこか別な場所で使われていたものを譲り受けて設置したものか。いずれにしろ頂部(ランプがあった部分)についてはかなり改良されて今の形になっているものと思われます。それは明治 15 年、銀座で初点灯された外灯は、しばらくはガラスに覆われた箱の中で電球が光っていたからです。でないと風や雨の影響を受けやすかったのです。

いずれにしろ分からないことばかりですので、これから書いてあることを解読し、外灯の形も調査していかなければなりません。

1) W・K・バルトン William Kinnimand Burton 明治 21 年、お雇外国人技術者の一人として来日。9 年間に渡り東京工科大学の土木工学科講師を勤める。スコットランド生まれ。ケンブリッジ大学を卒業し、衛生工学の研究を重ねている。日本各都市の上下水道の調査・設計にあたり、関係した都市は明治 22 年の福岡を初め大阪、岡山、門司、仙台などの 10 数市で、松江市は 11 番目に当たった。1896 年(明治 29)に台湾に渡り台北市などの上下水道の設計に当たったが 1899 年(明治 32)病を得て東京に戻り 8 月 5 日逝去した。享年 45 歳、32 歳から 45 歳までの 13 年間日本で活躍し、日本の水道の父と位置付けられる。彼の業績は水道のみならず、東京は浅草に建てられた当時の超高層建物、浅草十二階も設計した。惜しくも関東大震災で倒壊したが。

(平成 23 年 6 月 1 日 松江城部会 足立正智)